

引用句倒置の認可条件について

松原史典（京都女子大学）

1. はじめに

(1) のように、伝達節の主語と動詞が入れ替わる操作を引用句倒置と呼ぶ。(2a-b) から分かるように、引用句倒置は文末だけではなく、文頭や文中（引用句と引用句の間）でも起こる（下線筆者）。ただし、文頭で起こる場合は、ジャーナリズムなどのニュース記事に限定される。

- (1) “I don’t believe in ghosts,” said Tracy (in a loud voice).
(2) a. ‘I wonder,’ said John, ‘whether I can borrow your bicycle.’ (a, Quirk et al. 1985: 1022)
b. Said a pollster: “Frenchmen still like to believe that they are the world’s greatest lovers.” (b, Biber et al. 1999: 922)

本研究は、こうした引用句倒置に焦点をあて、倒置が起こる場合と起こらない場合の形式と意味の相違をインフォーマント調査により明確にした。さらに、引用句倒置に見られる特異な文法的振舞いを観察し、それに対して機能的アプローチと統語的アプローチの2つの説明法を提案した。

2. 引用句構文の形式と意味の相違

ここでは、インフォーマント調査（10名）に基づき、引用句倒置を起こす場合（V+S 語順）と起こさない場合（S+V 語順）の形式と意味の相違を解明した。調査結果として、形式については（3a-b）、意味については（4a-b）を参照されたい。（スペースの都合上、主なものだけを紹介している。）

- (3) a. いずれの語順も書き言葉であるが、S+V 語順の方が少しだけより口語的であり、V+S 語順の方が少しだけより文語的である。
b. V+S 語順の方が、「発話した内容」（= 引用句）と「発話した人」（= 主語）との位置的バランスがとれていて、V+S 語順の方が安定したデフォルトの形式である。
(4) a. V+S 語順では、S に強勢が置かれ、発話した人物が誰なのかがより強調される。
b. V+S 語順は、発話者 S が誰であるのか予測できなかった場合に使用される傾向がある。一方、S+V 語順は、発話者 S が誰であるのか予測できた場合に使用される傾向がある。

また、引用句倒置が起こる位置（文頭、文中、文末）の相違によって、意味的相違が生じるのかについても同様のインフォーマント調査を行い、以下のような結果を得た。（スペースの都合上、主なものだけに限定する。）

- (5) a. (2b) のように伝達節 V+S が文頭に置かれる形式は、かなり古風で不自然であり、今日では使用されない。この意味で、(2b) は非文法的であるように思われる。
b. (1) のように伝達節 V+S が文末に置かれる形式が最も一般的な形式（デフォルトの形式）である。
c. (2a) のように伝達節 V+S が文中に置かれる形式は、発話者 S と読み手との相互関係をより緊密なものにし、読み手に同情させたり、疑問点を共有させたりする劇的效果（dramatic effect）を生み出す。

3. 提案： 機能的アプローチ

上記のインフォーマント調査の結果を踏まえ、引用句倒置が起こる場合と起こらない場合のイントネーションパターンを比較することにより、両者の情報構造を分析した（ここでは割愛している）。その分析を基に、引用句倒置の特異な統語的振る舞いを説明するために、認可条件として以下の条件と制約を提案した。

- (6) <引用句倒置の認可条件 I>
引用句倒置は、伝達節が引用句に先行する場合、（よほど特別な意図がない限り）適用されない。¹
(7) <引用句倒置の認可条件 II>
引用句倒置は、主語（発話者）を重要度がより高い情報として焦点化可能にする操作である。
(8) <引用句倒置構文の伝達節に課せられる機能的制約>
伝達節の機能は、「誰」が発話したのかを明確にすることであり、V+S の要素だけで情報量としては十分であ

